じんけん瓦版 第58号

発行日：2015年7月5日

発行：日本聖公会東京教区　人権委員会

じんけん週間特集

人権委員会　佐々木國夫

人権委員会の生い立ち

1990 年第 74(定期)教区会に、当時の社会委員会および宣教委員会から議案第 7 号「人権委員会(仮称)設置の件」が提出され、「教会が人権問題に無関心、無関与であるがゆえに、差別の放置と助長に加担していることは、福音宣教の使命を阻害することです。そして、差別される状況に置かれた人びとに対して、教会の門を閉ざしていることにもなります」と訴えました。

この背景には、1983年5月、日本聖公会第38(定期)総会において、「天皇のための祈り」および「皇室のための祈り」の削除を内容とする「祈祷書改正の件」の議案審議中に、天皇のための祈祷を残すべきだとして審議打ち切りを求めた一信徒代議員が、「私は自分に振り返ってみますと、自分の娘を部落の一人とわかっている男のところへ嫁にやるかというと、躊躇するにちがいありません。」と発言した事実があります。この問題は、発言を行った当事者だけではなく、日本聖公会総会が、このような発言を許したこと、つまり日本聖公会全体の差別体質に起因するものであったと、1996年5月、日本聖公会第49総会において主教会は総括報告をしました。

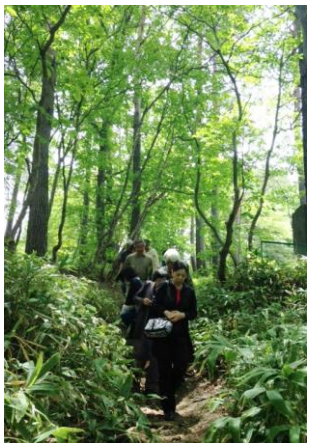
そうして、東京教区に人権委員会(当初は、人権擁護・啓発委員会)が発足し、部落差別、民族差別、障がい者差別、性差別等の差別事象(人権問題)への取り組み、人権問題に関しての啓発学習活動、人権問題に関する行政や人権関係諸団体の窓口等の活動を担ってきました。

じんけん週間企画

人権委員会では、2004 年以降、聖霊降臨日に始まる週を「じんけん週間」と定め、人権を侵害され、存在すら怪しくされている方々が、人間としての尊厳を回復されるように祈り、私たちがしなければならないことをせずに、してはならないことをしてきていることへの気付きを深め、共に歩んでいく道を見いだすときとすることを願って、毎年学びと祈りのときを持っています。これまで、「多磨全生園訪問」、「狭山事件・現地フィールドワーク」、「隣人に聴く―性同一性しょうがい」、「隣人に聴く―福音とジェンダー」等、実施してきました。

今年の人権週間は、5 月 29 日、群馬県草津町にある国立ハンセン病療養所栗生楽泉園・重監房資料館並びに草津バルナバ・ミッションを訪ね、ハンセン病の差別の実態を学びました。

ハンセン病は、1907 年施行の「癩予防法」により、1996 年同法が廃止されるまで、患者を終生強制隔離する、非人道的な政策が強行されました。療養所では脱走を試みたり反抗的な者も出てくる。そうした人を「重罰に処すための監房」として、正式名称を「特別病室」という名ばかりの医師は居らず治療もしない重監房が 1938 年に建てられ、1947 年に廃止されるまでの 9 年間、全国から延べ 93 名のハンセン病患者が収監され、そのうち23名が獄死させられました。重監房への収監は、各療養所長の独断で行われていました。これは、療養所長に所内の秩序維持を目的とする「懲戒検束権」という、裁判無用の患者を処罰する権限が与えられていたからです。次第に待遇改善を求めた人たちを収容する性格が強まっていきました。



重監房跡に至る小路

懲戒検束規定には、監禁期間最長2箇月とされているのに完全に無視され、入所者記録では平均 134 日、最長で 549 日も監禁された人がいました。獄死した 23 名中

13 名が冬季に集中しています。標高 1100m、冬は零下 15 度以下の極寒の土地で、暖房も医師の診察もない中で 13 名が凍死させられたのです。楽泉園入所者の人権闘争によって、監禁の実態をメディアが報じ、国会でも取り上げられ、重監房の運用は廃止されました。

草津バルナバ・ミッションは、1916 年から 1941 年までメアリー・ヘレナ・コンウォール・リー宣教師が中心になって活動しました。一人ひとりの患者が普通の人間としてその尊厳が守られ、生活を楽しみ、地元草津の人びととも共存する在り方が特徴です。今日の福祉の視点からも素晴らしいと称賛されています。しかし他方、近代日本のハンセン病政策の中で、近代天皇制国家の下、民族浄化や無ライ県運動（強制隔離）の国策を率先して担ったのは、日本聖公会も含めキリスト教の救ライ団体と医療従事者、聖職者たちだったことも忘れてはなりません。

「重監房」を復元した重監房資料館が 2014 年にオープンしました。「重監房」は、閉鎖して 68 年を経た現在、園内の雑木林の中に縦約10メートル、横約23メートルの基礎部分を残すのみとなっています。この跡地に立ち、二人の司祭とともに、非人間的な施設で、収容された人びとがどんな生活を送っていたのか、その酷い様子に想いを巡らせ、わたしたち人間の罪の赦しと獄死させられた人びとの平安を祈りました。

基礎部分のみ残す重監房跡

今回の企画について、現場下見から、当日のご案内まで、ご尽力いただきました草津聖バルナバ教会の松浦信司祭さまに感謝いたします。

今回、参加者は総勢 16 名、参加者から寄せられた感想の一部を掲載させていただきます。

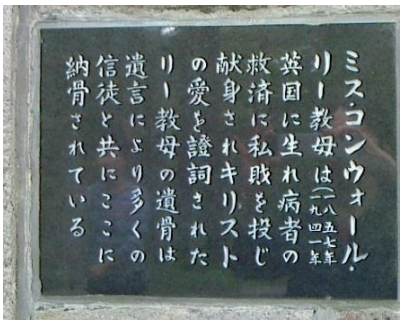
草津・栗生楽泉園　重監房資料館を訪ねて

立教学院諸聖徒礼拝堂　宮崎智子

このたび初めて草津・栗生楽泉園の重監房資料館を訪問し、視覚的体感的に知ることの大切さを思いました。かつて私は沖縄愛楽園の方々と交流を持つ機会を得ましたが、国立の療養所に宗教施設があること（＝ここで一生安らかに暮らすための施策）の意味も 20 数年前の当時は意識できずにいました。その後東京多磨全生園でおじいちゃんおばあちゃんたちとの交わりを持つようになり、全生園から草津の重監房に送られた人がいることを知りました。その人は作業用ゴム長に空いた穴が神経痛にさわるので交換してほしいというだけで、反抗的だ、と監禁室へ送られたのです。国によってハンセン病患者が社会から隠され、園の中でも更なる劣悪な環境の重監房へ隔離・監禁が行われていました。それらは理不尽で、人間の尊厳を一切奪い取るものであったことを、故人遺品など貴重な資料や再現映像、実寸大の監房に入ってみることで生々しく感じました。

草津聖バルナバ教会に隣接するリーかあさま記念館、マーガレット館、頌徳公園など、喜びの谷と言われた場所でコンウォール・リーの足跡に触れ、楽泉園では藤田三四郎さんの力強いメッセージを受けました。実際の重監房跡地に立った時、重苦しさと新緑の美しさに、言葉にならない切なさを感じました。

ハンセン病患者の隔離は国の間違った政策、その個々の非道な行為は人間によるものです。人が人を傷つけてしまうこと、これは自分のことでもあると、何もできずに傍観している自分でもあることを思います。資料館ガイドの方から「子どもたちに正しく伝えたい、つい最近でも小学校教師がこの病が伝染すると生徒に教え、問題になったことなどを本当に残念に思う」と伺い、今私ができることは、と自問しています。知ったからにはこのことから目をそらしてはならない。自分の家族や身近な人、特に年若い子どもたちと一緒に考え、いつも忘れずにいたいと思うのです。療養所には元患者さんおひとりおひとりのストーリーがあります。それらを何度でも繰り返し聞き、反芻し分かち合いたいと思います。折々に聖書を読むのと同じように。



リーかあさま記念墓碑

草津・栗生楽泉園　重監房資料館を訪ねて

池袋聖公会　藤田　美土里

東京から約三時間、車でないと辿りつくことの出来ない遠く離れた草津の地に昨年できたこの「重監房資料館」を訪ねる企画に参加させて頂き感謝いたします。

感想をと思い言葉を並べてみてもどんな言葉も空しく感じ、あの場に立った時の重く苦しい思いを表現することは出来ませんでした。「重監房資料館」の中に再現されている建物は実際には「特別病室」と看板が掲げられていることに一層の恐ろしさを感じました。

「ハンセン病」、この病の過酷な歴史を資料館では知ることが出来ます。闇に葬られてしまう所であった貴重な品々が並んでいます。跡地から見つかった何気ない食器や眼鏡、鍵など私たちの日常にも見る事のある品物ひとつひとつがそこで過ごした方々の過酷な監禁を物語っています。この病気はただの病気ではなく罪、辱、報いという扱いをされたのでしょう。患者を自分と同じ人間とは見なさず絶滅させることこそ国民を守る正義であるかのような思いが背景に感じられました。国の身勝手な思惑と社会の無関心がこんなにも多くの人の命を奪ってしまうのだとは。ひとりひとりの大切な命の上に積み上げられてきた「人権」を当たり前の事ではない事を忘れないでいたいと思います。そしてまだまだ語りつくされていないであろう思いを知り続けていきたいと思います。

故人の遺品の数々

眼鏡は視力の弱い人の必需品なのに、退室時に返されることなく、人知れず土中に捨て置かれていた

出土した南京錠

出土したいくつもの南京錠は、過酷な監禁施設であったことを今に伝えている

自分を愛するようにあなたの隣人を愛しなさい

目白聖公会　水谷麗子

今回の研修で印象に残ったのは、楽泉園入所者藤田三四郎さんが話してくれた聖書の言葉【自分を愛するようにあなたの隣人を愛しなさい】と重監房跡の意外にも穏やかな景色でした。

ハンセン病が、未知の、そして怖い病気だと考えられていた時代に差別しないことが、果たしてできたか？それは私には無理ではないか？

重監房について学ぶうちに誰にでも重監房に入れる側にも入れられる側にもなり得る怖さを感じました。そんな中、藤田三四郎さんの口から話される力強いみ言葉【自分を愛するようにあなたの隣人を愛しなさい】は、この心を持ち続けることが大切ではないかと気づかせてくれました。また、たくさんの人が孤独の中に亡くなった重監房跡は、重苦しい雰囲気を予想していましたが、訪ねた時には虫が鳴き、静かで穏やかな空気が流れていて、そのギャップがかえって印象的でした。

研修の内容は重く深く心に残る物でしたが、それだけではなく行き帰りの車中など楽しい時間も過ごせました。たくさんのことを感じ、考え、また、たくさんの素敵な方達と出会うことができた研修でした。

藤田三四郎さん（前列中央）を囲んで

広島平和礼拝2015のご案内

広島平和礼拝の目的

1．原爆犠牲者を追悼し、世界平和のために祈る。
2．次代を担う人たちに原爆の悲惨さ・戦争の愚かさを伝える。
3．「主の平和」を学び、その実現のために活動する。

■ テーマ：**ともに学び、行動し、祈ろう。そして一歩前へ。**
■ 聖　句：**キリストの平和があなたがたの心を支配するようにしなさい**
（コロサイの信徒への手紙 3:15）
■ 開催日：2015 年 8 月 5 日（水）－ 6 日（木）

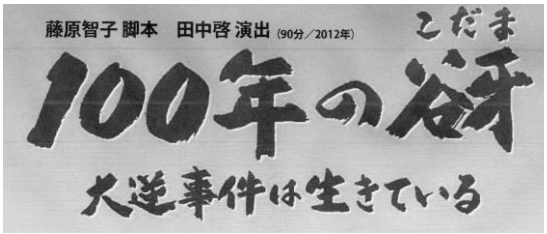
「正義と平和協議会」「人権委員会」「信仰と生活委員会」は、参加される青年に一人２万円を援助します。詳しいプログラムは教会へ配布されている「ご案内」をお読みください。

申し込み先：井口司祭（清瀬聖母教会　TEL0424-93-7472）宛にお申し込みください。
申し込み締め切り：7 月末まで

「上映会」2015 年 9 月 5 日(土)

大逆（たいぎゃく）事件とはなんだったのか

国家と司法、国家と人権、国家と私たち…
それは 100 年たった今も重い問いとして
私たちの胸に研し続けている



（100 年の谺上映委員会 HP より抜粋）

会　場：矯風会館 1 階ホール（東京都新宿区百人町 2-23-5）
上映時間：1）13：00～　2）16：30～
主　催：日本聖公会東京教区人権委員会、公益財団法人　日本キリスト教婦人矯風会
入場料：前売券 800 円／当日券 1,000 円　　前売券は、下記の各人権委員が販売しています
井口司祭（清瀬）、植田栄基（月島）、大森司祭（浅草）、岸田静枝（清瀬）、
小林幸子（三一）、佐々木國夫（葛飾）、松本潤子（池袋）、森田信也（三一）

お問い合せ先：日本聖公会東京教区人権委員会（佐々木國夫）
male：k-sasaki4539@fd6.so-net.ne.jp　FAX：0424-91-1239
日本キリスト教婦人矯風会　事務局
male：kyohukai@titan.ocn.ne.jp　TEL：03-3361-0934

守大助さんに手紙を
仙台北陵クリニックえん罪事件で、
再審請求を戦っている守大助さんを支えてください。
ひとこと励ましのメッセージを送ってください。

[宛先]
〒264-8585
千葉県千葉市若葉区貝塚町 192
守大助様